

# ふるさと 二宮

- ◆二宮小学校の変遷
- ◆郷土を築いた先人
- ◆ふるさとの歴史
- ◆二宮の由来
- ◆史跡・伝説・民話・神話

保  
存  
版



▲明治42年4月新築された二宮小学校



▲旧二宮小学校正門入口

長い歴史の流れの中には栄枯盛衰の人間のドラマがあり、また政治、経済、産業、学術、文化の面でも数多くの先人たちの偉業の積み重ねがあって、今日の郷土発展が築られました。

私たちが先人をしのび 徳を讃え史話・実話を探り、ふるさとをよく知りより愛することを後世に継承していきたいと思ひます。

【発行責任者】小川 憲治  
【編集責任者】森 義範  
【監 修】山藤 朝之  
【資料協力】市教育委員会・図書館

# ◆島根のあけぼの

## ●縄文式文化

先土器文化の生活用具である打製石器が瑞穂町の荒嶺遺跡で発見され、一万年以前のものとも発表されている。(縄文遺跡は県下で四十数所発見されている)

## ●弥生式文化

前期のものは海岸近くに多く、川の下流域の低湿地にある。弥生文化は北九州から日本海の海岸に沿って流入したと考えられる。中期・後期の弥生遺跡はさらに広範囲に分布している。後期の土器も、中部瀬戸内出土のものと大差なく、山陽、山陰西部の文化的な強いつながりを見ることが出来る。

## ●記紀の出雲神話

古墳文化を背景に、中央政府では「古事記」「日本書紀」の編纂が行われ、出雲を舞台にした神話は重要な位置づけが与えられている。その中で須佐之男命の大蛇退治の神話は有名です。

島根県が誇る古文獻は、和銅六年(七一三)は日本に残る最古の地誌書でもある「出雲国風土記」で、その巻頭に八束水臣津野命による「国来」「くにこ」といふながら新羅の国の余りを大鋤で



石見神楽

切取り、綱をかけて引つ張りつなぎ合わせたのが杵築御崎で、その綱が菌長浜、これをつなぎ止めた杭が佐比売山である。

神様と言えば、暦の上で十月を神無月(かんなづき)と言いますが、島根だけは神在月(かみありづき)なのです。

全国の神様が年に一度、出雲に集まり、その年の諸事万端の取り決めをされます。このように古代の数々のロマンを偲ぶ「神々の國」

「國引きの國」島根は、隠岐・出雲・石見の三国からなっています。

## ●世界遺産「石見銀山」(二〇〇七・七月登録)

大森銀山の開発は鎌倉末期、大内弘幸によつて発見された。本格的な開発は大永6年(一五二六)博多の神谷寿貞による。寿貞は大内義興の援助により、出雲の鷲の銅山主、三島清右衛門の協力を得て、石見山の地を掘り地下の銀を掘り出すことに成功した。義興の死後、石見銀山は戦国の武将により、争奪戦が繰り返された。



龍源寺間歩

関ヶ原役後、石見の地は徳川の支配地となり、初代奉行として大久保長安が入った。石見銀山の開発は急速に進められ、大久保間歩・釜屋間歩などが開かれ、最盛期を現出した。山師安原伝兵衛が開発した釜屋



出雲大社

間歩は一年の運上銀三、六〇〇貫に達したといわれ、慶長八年(一六〇三)八月朔日、大久保長安に伴われた伝兵衛は、伏見の家康のもとへ莫大な白銀を献上し、家康から着用の胴服(黄地丁字模様辻が花染)と扇子を賞賜された。今は大森町の清水寺の寺宝となっている。

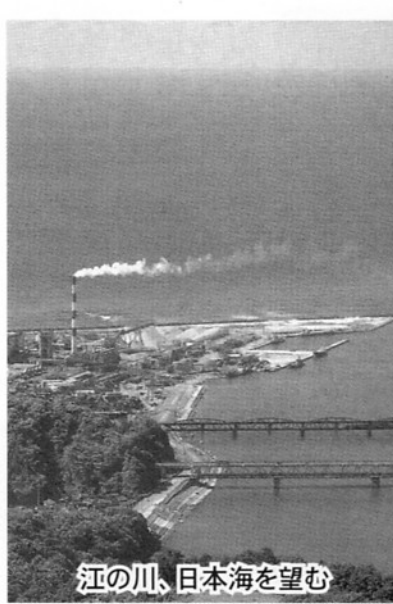
## ●いも代官 井戸平左衛門

享保一六年(一七三一)大森代官として井戸平左衛門正朋が着任した。当時、凶作に農村は疲弊していたが、翌一七は大飢饉となつたこの時、平左衛門は、領民救済のため官米放出や年貢の減免を行い苦心の末、薩摩国から甘藷を移植した。その後たびたびの凶作から石見の農漁民を救った。今も大森に井戸神社(明治一二年創建)があり、石見の各地に彼の頌徳碑が建てられ、毎年十一月二六日「いも法事」を営み、井戸代官の恩徳をしのんでいる。

## ●天明大田騒動

この地方の事件に、天明三年(一七八三)の大田騒動と呼ばれる、百姓一揆がある。凶作下米価暴騰に抗して、大田南北町の下層農民が富豪層を襲撃した事件である。慶応二年(一八六六)七月、長州戦争に幕軍は敗退し大森代官鍋田三郎右衛門も備中倉敷へ遁走した。一揆は石東一円に波及したが、長州軍の進出によって鎮圧された。慶長頃最盛期を見せた石見銀山は、元禄期には衰退の兆を見ることになる。中期以降は休山となるものが多く文政頃には二七九口がわずかに三十二口が稼間歩となっていた。

# ◆江津のあけぼの



江の川、日本海を望む

## ●成立

昭和二十九年(一九五四)四月一日、江津町・都野津町・川波村・二宮村・跡市村・浅利村・松川村・川平村・江東村の2町7カ村が合併し、市政が施行されて成立。同年十月一日、桜江町の大字清見・井沢の一部を編入。同三十一日八月一日、国府町の大字本明・上有福を編入。

## ●概要

江津市は島根県の中央部よりやや西よりに位置し、東西が二十一、五km、南北が九、〇km、面積が一五八、四一平方kmのまちです。市の中央を中国一の大川である江の川(中国太郎)が南北に悠々と流れ、河口を中心として開けたまちです。南北朝時代の昔から山陽と山陰を結ぶ江の川の船運要衝として栄え、江戸時代中期には全盛を誇りました。

慶雲二年(七〇五)、頃万葉歌人柿本人麻呂が石見に赴任したゆかりの地としても知られ、人麻呂とその妻「依羅娘子」(よさみのおとめ)にまつわる多くの歌や伝説が伝えられています。

## ●「万葉集」に見られる石見

山陰に関する歌が五十首ばかり納められている。その大半は、石見国庁にいた、柿本人麻呂の歌で、八世紀の初め頃、石見国府に官人として赴任のおり

「万葉集」巻2に、万葉集の秀歌とされている長短十首の石見相聞歌を残している。臨終歌「柿本朝臣人麻呂、石見国に在りて臨死らむとせし時、自ら傷みて作れる歌一首」として「鴨山の岩根し枕ける吾をかも知らにと妹が待ちつつあらむ」がある。人麻呂終焉の地、鴨山の所在については、梅原猛さんの万寿三年(一〇二六)の地震で沈んだといわれる益田市沖の「鴨島」の説、浜田市城山の亀山説、江津市神村説、奈良県葛城連山の説、斎藤茂吉は邑南町湯抱の鴨山と推定している。

人麻呂の辞世の歌「万葉集」に長歌十六首、短歌六十六首が掲載されている。出生は大化年間(六四五～六四九)益田市戸田で、大和の国から下った柿本一族の者と語り部の綾部氏の娘との間に生まれたという伝承。壬申の乱が終わり、律令国家の基盤が確立されるころ、すでに都にいます。持統・文武両朝の宮廷歌人として頭角を現わし、天皇の御幸にもしばしば同行、旅先の叙景を雄渾に歌いあげた。「近江の海 夕浪千鳥 汝が鳴けば、こころもののにいこしへ思ほゆ」がある。



柿本人麻呂



益田:持石海岸

長歌では傑出しており、高市皇子の死を悼んだ挽歌、石見の国から上京のおり妻を思つて作つた作品など、傑作を数多く残しています。

## 「柿本人麻呂と依羅娘子の歌碑」

人麻呂は晩年に石見国の国司として赴任し、角の里の依羅娘子と巡り合います。枕歌は、人麻呂が石見の国で死に臨んで詠んだ歌や、妻と別れる時に詠んだ歌碑が、江津市には6基あり全国的にも例を見ないものです。

・島の星人丸神社歌碑・都野津町柿本神社歌碑・二宮町恵良の依羅娘子歌碑・波子辛の崎歌碑・二宮交流官顕彰歌碑・高角公園記念歌碑が在る。

「石見のや 高角山の木の際よりわが振る袖を妹見つらむか」(人麻呂の歌・巻二ノ一三三)「な思ひと君は言へども逢はむ時 何時と知りてかわが恋ひざらむ」(依羅娘子の歌・巻二ノ一四〇)

## ●柿本人麻呂の歌と地名

「万葉集」巻2の人麻呂の歌の中に、この地域の地名が多く見える。「石見の海角の浦回を…和多豆の荒磯…」の角の浦は江津から波子の大崎鼻にいたる長汀とされ、和多豆は渡津に比定される。人麻呂の妻といわれる依羅娘子は二宮恵良の里の生まれとされ、ゆかりの地 都野津には人麻呂の松がある。「石見のや高角山…」は現在の高角山(島星の山・星高山ともいう)「角障ふ石見の海の…辛の崎…妻こもる屋上の山…」の辛の崎は大崎鼻、屋上の山は八神の室上山、「鴨山の磐根し枕ける…」の鴨山は二宮の高神山という説もある。高神山には古代烽火が設けられている。

## 「江の川と日本海」

江の川は全長一九四kmで中国地方最大の大河川で、「中国太郎」の異名を持っています。その源流は、広島県山県郡大朝町阿佐山に発し、三次において馬洗い川、西条川、西条川および神野川を三方より合わせ西流し、狭さく部となり島根県に入り出羽川を合わせて北流する。邑南町において大きく屈曲し、再び西流に転じ、途中、八戸川など合わせて江津市において日本海に注ぐ。雄大な日本海は四季折々の表情を見ることができ、豊かな海のめぐみや海水浴、釣りや海のレジャーも満喫できます。水平線に沈む夕日は絶景です。



## 夢街道ルネサンス認定

### 「天領江津本町裏街道」

古くから江の川の舟運と日本海への海運の要所として栄え、寛文年間上方航路が開かれると北前船の寄港地や天領米の積出し港として川岸には四、五〇隻の帆船が林立し、浜田での入港を待合わせる船があるほどの混雑ぶりであった。

当時は大森銀山に次ぐ石見第二の賑わいを見せる石州赤瓦の光り輝く天領の町でした。幕末の慶応2年には、長洲軍



振武隊隊長佐々木男也、参謀大村益次郎以下の一個大隊四五〇名余りが進駐し、本陣が置かれました。明治四〇年には東宮殿下(大正天皇)山陰路御行啓に際し、本町への御駐泊の光栄を賜りました。これらの史実においても地域の繁栄と重要性をうかがい知ることができます。江戸期から昭和初期にかけての繁栄ぶりは、現在でも町に点在する商家や土蔵、多くの神社仏閣、さらに明治・大正時代の郵便局や役場など数多くの歴史的建造物でもうかがえます。「天領」と当時より赤瓦の輝く町であり、現在でも全国的な知名度と生産量を誇る石州瓦の主産地でもあります。私たちが先人達の偉業を知り、地域の文化や歴史を見直すとともに埋もれた文化と歴史も再発見し、地域の素晴らしさを未来へと伝えていきたいと思えます。

## ● 観光スポット&祭り

### 「アクアス」

水族館としては、中・四国地方において、飼育動物数・延床面積・総水量で最大級を誇る。西日本では初のシロイルカのショーを見ることができ、約一、〇〇〇トンの大水槽には、島根ならではの魚類を展示。また、海底トンネルは幻想的な世界を体験できる。



### 「風の国」

伝統工芸を体験できる「風の工房」、家族やグループでくつろげる「森の小舎」屋根付テ

ニスコート・ゲートボール場「森の広場」遊具を備えた芝生広場や遊歩道も整備され、「森の蘭舎」ではエビネランの栽培も行っています。

### 「水の国」

水ふれあい公園「水の国」は、「水」を素材にした芸術、科学を楽しめる国内最大級の水のミュージアムです。「アートゾーン」では、芸術家たちが空間や音、光を駆使した作品を展示しています。

### 「椿の里」

島の星山(高角山標高四七〇m)の中腹。世界各地の椿の花が植えられ、一〇〇種類七〇〇本の早咲きや遅咲きなど年間七ヶ月が楽しめます。毎年3月には「椿まつり」開催。

### 「江の川祭」

石見神楽にちなんだ「おろちボートレース」や市民総参加の「江津市音頭パレード」「花火大会」は川面を流れる「灯ろう流し」と、「星高山のイルミネーション」が情緒をかもし出す江津の大イベントです。

### 「宝来栄」

「ホーランエー」のかけ声が川面に響く、石見三大祭りのひとつ山邊神宮から出た神輿は、江の川に浮かべた御座船に乗せ、三隻の伴船を従えて川を渡ります。



# 郷土を築いた先人

## その足跡と生涯

〈文・写真提供〉 山藤 朝之

### 【大前 真矣】

本村第一の富豪で、また名望家で公共事業などに金品を惜しまず出費し大いに貢献した。

村内の子供の将来を考えて早くより塾を開いて薫陶し、教えることは勿論のこと、村民からも敬愛されていた。資性高邁にして、経学・文章学及び技芸術に長じ徳行の人なりきと記録に残されている。

神主尋常小学校は、明治九年（一八七六）六月二十八日第四学区島根県第二十一中学区四番地の「竹ヶ下」に開設された。当時、神主村では多嶋神社の社司であった大前真矣が江戸末期から明治初年にかけて村内の青少年を集めて「竹ヶ下」に塾を開いており、神村、有福村などからも通塾する者もいた。これが小学校の基盤になった。



▲大前真矣の墓。  
二宮町神主宮ノ谷の  
大前屋敷の上にある。

学校は「竹ヶ下」から太平寺の向かいの迫屋敷（神主イ四四九ノ四五〇番地）に二教室の校舎、付属建物など新築移転した。塾時代から明治初期の学校教育に於ては、初代の二宮村長・森脇善一郎（神村小学校初代校長兼訓導）有福村々長・森脇平作、銀行頭取で会社々長・山根馬之丞、帝大卒業で法学士、弁護士であった外村（旧姓・大崎）林吉（明治六年生）帝大卒業海軍大主計、宇津巻美輝（明治元年生）、隠岐県知事となった千代延（旧姓・吹金原）総建（文久二年生）、龍雲寺四十世、花吉禅翁氏の名が記録にある。

### 【森脇 善一郎】

善一郎は、文政六年（一八二二）神村（江津市二宮町神村）の屋号、西向に生まれ幼少にして聡明、やがて神主村（二宮町神主）の大前真矣の竹ヶ下塾に学び、更には明治八年（一八七五）神村夜須神社の神楽殿に、第四学区第二十二中学区三十九番小学校として、神村尋常小学校が開設されるや、初代の校長兼訓導として、村内の子弟の教育にあたった。明治二十二年（一八八九）市町村合併での二宮村々長となった。善一郎は民生の安定と、村内の殖産に努め、自ら養蚕に精出し、養蚕の知識、技術を得るため、遠く関東の群馬県の地に研修した。村中に桑ノ木の栽培を奨励し、村内に養蚕を起し大いに成果を挙げ、二宮村の基礎固めを行った人として、大いに村民に尊敬された。



▲村長時代の  
森脇善一郎

明治三十年九月二十二日没す。享年七十四歳。墓地は神村に在ったが現在は不明。

### 【千代延 聡建】

聡建は、文久二年（一八六二）神主恵良の屋号 山根に生まれ、名は惣市。幼年大前真矣の竹ヶ下塾に学び、塾生でありながら師の代理が出来た。ほどの逸材であったといふ。明治九年（一八七七）



▲隠岐島司時代の  
聡建

神主小学校の開設とともに入学する。在学中は勉学に励み俊秀の誇れ高く、他生徒より群を抜いていたと言われ、当時の先生が「将来有望卓絶の才ある子なり」と言い、愛育一方ならぬものがあつたといふ。惣市十七歳のおり同村千代延ラジの嗣子となり、千代延姓となる。何歳の時か定かでないが、島根県

巡查を拝命する。その後、勤務の功顕著により警察署長となり、更に累進して邇摩郡長、美濃郡長、簸川郡長などを歴任し、大正七年（一九一八）隠岐島司となり同九年退官した。何時の頃、聡建と改名したか定かでない。聡建は若槻礼次郎が、昭和六年四月第二次内閣総理大臣になったおり、祝賀会に参列するための上京の途中、車中にて脳溢血で倒れ、以後療養するも甲斐なく昭和十年十月没す。享年七十四歳。正五位勲四等。

### 【宇津巻 美輝】

美輝は、多嶋神社鼓頭宇津巻三十代 重行の子で後の多嶋神社宮司宇津巻高芳の令弟、幼くして大前真矣の竹ヶ下塾に学び、明治九年神主尋常小学校開設とともに入学する。成績優秀で卒業し、家業の酒造を手伝っていたが大宝坊（神主宮ノ谷）の住職に誘われ、近郊の若者数名と京都に出る。



▲宇津巻美輝の生家。  
右側の土蔵は明治四年  
建築の酒倉、左側は同  
年建築の倉庫。中央の  
家は昭和三十年代建築  
のもの

途中で引き返す者などあり、結局 美輝のみが残り、兄高芳の許しを得て京都府立中学校に入学。抜群の成績で卒業する。更に第三高等学校法学部（現在の京都大学）を終え、法学士の称号を受けた。（明治三十一年七月）続いて専門大学部進学も考えたが、高年齢であったことや、早く生家に恩返ししたいため、師の推薦もあつて海軍主計官の道を選ぶ。明治三十三年（一九〇〇）海軍主計少尉、以後昇進して明治四十一年九月海軍主計少佐、大正二年（一九一三）六月退職する。明治三十三年北清事変、明治三十七、八年日露戦争に参戦する。昭和十四年没。墓所は滋賀県彦根市にある。享年七十二歳。海軍主計少佐正六位勲四等功五級。

## 【近重末市】

慶応元年生まれ。石見瓦製造の先駆者。

大正七年十月、民家の無かつた青山地区に瓦製造工場を建設して民家を集め瓦製造業者も六業者を数えるに至った。

昭和七年一月、六十八歳で永眠したが、瓦業者は青山地区が瓦生産地として有名になったのは、近重末市氏の実業によるものだと、昭和十六年、高さ二、五mの記念碑を(旧青山中学校入口)に建てた。

## 【大崎 林吉】

(外村 林吉)

林吉は、神主村の屋号、

柳屋の五代 治三郎の三男で

明治六年(一八七三)の出生。神主尋常小学校に入学、抜群の成績で卒業する。卒業後しばらくの間、小学校の代用教員として働いていたが



晩年の大崎林吉

青雲の志を抱き、父の働く(宮大工)九州福岡に行き、福岡中学校に入学し卒業する。更に進んで熊本第五高等学校、続いて東京帝国大学法学部に入學。銀時計を拝受して卒業する。卒業後、東京で生活するが、やがて京都の豪商、外村家(名字 帶刀の許可)の長女と結婚、外村家の人となる。

東京の法曹会や銀行家として大いに活躍。その後二宮村より常に四、五人の甥や姪を預かつて、中学校や女学校に通学させた。また、大正十四年(一九二五)ころ浜田にて弁護士を開業した。

林吉は性格が几帳面で厳格、勉強熱心で仕事の余暇は、特に佛教の勉強をしていたという。

遊びに関しては全く無関心であった。長男の結婚を機会に林吉は元の大崎姓に復した。残念ながら職歴等の記録が無い。

昭和二十一年没。享年七十四歳。

## 【宇野 定吉】

定吉は、明治二十一年

(一八八八)二宮町神村の屋号 伊久里埜に生まれ、大正八年(一九一九)二宮村役場に奉職。

同年、収入役に抜擢され、同十一年助役として村行政に力を発揮した。

大正十五年推されて第五代村長に就任。

率先して耕地の整理にあたり、村内 殆どの田圃の整理を成し遂げた。また農作業道や村道の整備を行い、村民から道路の神様と言われたほど、道路の整備並びに新道建設に力を注いだ。

昭和十二年(一九三七)村長を辞職する。

昭和十二年夏、日中戦争勃発、以後満蒙開拓の期待される中、定吉はこれを希望し、昭和十四年、島根県が作る第九次満蒙開拓団に応募。同年八月採用され三瓶道場で訓練後先遣隊として九月渡満する。満州の第一次弥栄村向陽訓練所に入り訓練後、翌十五年二月 島根県第九次開拓団幹部として、北安省慶城県北四合成に入植する。同年十月、家族も渡満入植する。以後定吉は団長として、団員を鼓舞し着々と開拓に力を発揮し、大いに期待されたが昭和二十年終戦となり、志半ばにして昭和二十二年帰村した。以後 家族とともに大田市に移住。昭和三十八年四月没す。享年七十五歳であった。

## 【川崎 達之】

(文提供 小川 憲治)

昭和六年満州事変勃発。翌年には国際連盟脱退。五・一五事件等 暗雲漂う。

昭和七年四月二日、山口県美祿市大嶺町平原において、父利静、母ツギヨの三男として生まれる。

昭和二十一年三月、父祖伝来の地である島根県江津市二宮町神主に引揚げました。旧浜田中学校、早稲田大学を卒業。職歴では、東急コミュニティー

の取締役社長を経て会長に就任。黄綬褒章受賞。

二宮村長時代の宇野定吉



## ◇文化シリーズ◇ 堂ノ坂菩薩

二宮町神主

ダイシコ

従来、堂ノ坂地藏 或いは「大師子さん」とも言われていたが、像を見るに名にふさわしくない。この度堂の再建を機に「堂ノ坂菩薩」と呼称することに。去る五月吉日 近くの有志の奉仕により、堂ノ坂にあったお堂が老朽化したので、十一組の蔵本宅近くに移転再建した。この菩薩は木像で十三体あり、今から千年も昔 大津浪により、ホセキの浦(現在のKKコウノの奥)に寄っていたものを

周りの人々が、お堂を作り安置し供養し守つて来た。され、戦前までは十一月の亥の子の日に、近くの各家々に一体宛持ち帰り供養し、翌日「コヒロ」に包みお返しすれば、子供が一年中風邪をひかない!との風習があったという。近隣に珍しい菩薩様ではある。

皆様のお参りを期待します。(文 山藤 朝之)



# 城跡探訪 ◆高田城跡

山陰の城は、雄壮な天守閣を持つ松江城のほか、各地の江戸時代の城が知られ、戦国時代以前の城館跡や、幕末の台場も在り、その数は島根県で一〇九七(出雲五八一・石見四九七・隠岐一九)。

二宮小学校の正門から見える、お馴染みの要害山(高田城)の変遷を辿ると、高田城址は標高九六メートル。城主兵庫の代は高田城、城主内蔵之助は城主、都野一族、大崎民部は高田城と称した。

後醍醐天皇(一三三二)の船上山行在所に参上した鷹多兵庫重武の名が有名。重武は、延元四年(一三三九)新田左馬之助義氏に従い、市山城攻めに参加、興元元年(一三四〇)日野邦光に従い、南朝方の豊田城を授け、興元四年二月、上野頼兼、益田兼見が都野の千金城を攻めようとした時、これをくい止め同年八月、十一月の両度合戦した。正平五年(一二五〇)九月、高師泰の来襲にあい、島ノ星城陥落、退いて高田城による。兵庫の子、志摩重興、その子、兵右衛門重光、その子、権左門重久、父子四代忠勤を怠らなかつた。

応永十一年(一四〇四)重久の子、清左衛門重春が、渦巻と名乗った。南朝の忠臣、城主内蔵之助とは、重春の子、重吉、その子、重虎その子、重一の三代を指す。

永禄五年(一五六二)二月、福屋氏滅亡の余波を受け没落し、都野一族、大崎民部がこれに拠る。民部は、毛利に属し高田城主となり

元亀元年

(一五七〇)

浜田石川に戦い、三隅に転戦した。

◆神村には、

元亀元年

に没落し

た神村下

野守長武

の居城(神

村城址)が

在る。長武

は福屋の主

将で弓の名人で知られ、永禄五年(一五六

二)松山城で討死後、明善寺に葬られたが

廃寺となり、今は「明善寺」の地名が残る。

近くに墓所がある。



▲二宮小学校正門から高田城址を望む

## ◆飯田城(二宮町飯田)

弘安役後、警備のため、石見に来住した肥後の菊地一族がある。下有福、飯田、羽代を領していたが興元二年(一三四二)武家方生越七郎光民が加志岐城に入り猛威を振るって飯田領をも侵そうとするので都野(大崎)氏と協力して所領の安泰をはかった。二宮町に羽代「城之内」に支城(羽代城)がおかれ、元応年間、孫鶴丸がこれに拠った。

## ◆殿峯城(敬川町左奈目)

山藤美濃守の同族、近江守山藤九郎左衛門は、上村下殿井の要害に居り、後代、宇屋川に移り、上野九郎左衛門と称す。更に左奈目に転じ、波上山(殿さん山)殿峯城に拠る。山腹

に古墓有り世人これを山藤家先祖の墓と言ひ、毎年二月十一日「山藤祭り」を執行している。

## ◆高鉢城(跡市千田)

城址は、高鉢・兵庫の二山にまたがる。永禄のころ、来島兵庫頭の居城であった。

## ◆多鳩神社

石見の二宮と称された古い社であり、八六一年に創建されました。海神として崇敬され、舟人が南国より持ち帰ったとされる「ナギ」の大樹があります。



石見二宮(多鳩神社)の神主職と社領を都野一族が安堵されたのは、長禄年間(一四九七)の保重のとき。

その後、五〇〇年もの時が流れ、歴史や時代の変遷により地方にも近代化が進み、平成二十年(二〇〇八)の今日では、高田城址山麓を高速道路が開通している。

## ◆長久寺

二宮町神村の長久寺は、天正年中、山藤美濃守玄英、都野三左衛門家頼は、長久寺を香華寺と定め、山門の興隆を資け同寺中興の開基と言われ、門前に碑が建てられている。



▲長久寺